

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4075500696		
法人名	有限会社ケア・ポートヒロタ		
事業所名	グループホーム サルビア ブルー		
所在地	福岡県宮若市宮田41番地5		
自己評価作成日	令和2年10月15日	評価結果確定日	令和2年11月6日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリずん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和2年10月23日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

月2回の提携医療機関の医師による往診、週1回の医師による回診、歯科往診等、医療・介護の両面で安心した生活が送れるようサポートを行っている。
新型コロナウイルス感染拡大により、これまでと異なる対応を強いられているが、さまざまな予防策を実践し、あらゆる感染症予防に役立っている。
また、地域に根付いたスーパーや地元物産店で季節ごとの食材を購入し、家庭的な料理を提供している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開所以来の理念を具現化するために、仕事の目的や社会人としての価値観を掲げ、機会ある毎に具体例を通じて、社会人としての介護職の成長が不可欠であることを管理者は話している。ケア会議で可能性を探るアイデアを話し合い、実践やモニタリングを繰り返して嚔下困難や便秘を改善したり、感情の起伏を不安に起因する状態と理解したケアで、「あなたでよかった、待っていた」と笑顔で話される入居者もある。9月の台風襲来時の停電は、稼働しなかった自家発電機の操作手順を確認する機会となり、職員にはアンケートで振り返りを行い、防災意識を高めている。研修や資格取得の推奨、ユニット毎に主任や副主任を配置した体制で人材育成やチームケアに努め、生き生きと勤務できる体制づくりをしている。コロナ禍の中、ガラス越しでの面会やホーム便りで家族との関係継続を支援しながら、永年商工会議所の役員を務めている管理者は、地域の活性化や地域密着型サービスの発展のために尽力している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット/
事業所名 **グループホームサルビア ブルー**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関や各ユニット内に掲示されており、常に意識したサービスを提供するよう努めている。また、年に一度全体会議を実施し、新人職員にも意図を理解出来るよう説明している。	開所以来の理念を具現化するために、仕事の目的や社会人としての価値観を掲示している。機会ある毎に具体例を通じて、社会人としての介護職の成長が不可欠であると管理者は話している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	これまで地域行事(盆踊り・山笠・神社祭り)等に参加していたが、2月以降、新型コロナウイルス感染拡大により、各種行事が中止となった。また、面会制限中であり、現在は地域の方との交流が殆ど無い。	昨年の暮れ、神社の祭りで職員が務めた巫女は地域の方々に大好評であった。永年商工会議所の役員を務めている管理者は、地域の商店や物産所で食材を購入し、様々な情報を得ながら、地域やホームの発展のため尽力している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	2ヶ月に1度運営推進会議を行い認知症の話や状態などの説明を行っていた。2月までは通常通り開催していたが、4月以降はスタッフのみでの開催を継続中。結果を書面にまとめ、関係各所に配布している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	入居者の状況や行事等の報告を行い、地域の方より意見を頂き参考にしている。また、外部研修に参加したスタッフは、どのような内容で何を学んだかを発表した。	会議が開催できない期間は、入居者の状況や内部研修などを書面で運営推進委員に報告し、会議録は玄関で公表している。職員が輪番で司会や書記を務め、会議の目的や内容の理解を深めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には、市担当者の出席を頂き情報交換を行っている。広域連合や福祉事務所の担当からご意見をうかがうこともある。4月以降は施設関係者のみでの開催である。	管理者が地域同業者協議会の事務局を務め、年度毎の会長が市担当者に挨拶に出向き、情報交換に努めている。ケースワーカーと日頃から密に連携し、必要書面を送付したり、新規申請について相談している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	マニュアルを作成し、運営推進会議・ユニット会議で「身体拘束をしない取組み」について報告している。身体拘束をやむなく行う場合の三原則「切迫性」「非代替性」「一時性」はあるが、あくまでも身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	運営推進会議で身体拘束適正化について報告している。チェックリストで拘束をしないケアに取り組み、ベット柵に緩衝材を巻き付けたり、車イスのフットレストにカバーを付けるなどの工夫をしている。転倒回避を強く要望される家族の思いを汲み取り、入居者の動向を常に見守っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	「GHみやわか」において毎年研修が行われており、当スタッフも出席して意識向上・防止に努めている。また、身体的・心理的なストレスを解消出来るよう休暇をとり、支援にあたっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見人制度を利用されている方もいらっしゃる。契約時にパンフレット等の書類を準備し、説明している。	日常生活自立支援事業や成年後見制度に関するパンフレットを整備し、入居時に説明している。制度を活用している方の後見人に定期的に報告書を提出している。現在制度利用を検討中の入居者もあり、地域同業者協議会主催の研修に参加予定である。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居契約時に書類を用意し、ご家族へ細かく説明を行っている。 但し、遠方在住だったり、高齢であるなどの事情により、十分な理解・納得を得ることが難しくなっている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者の重症化により、御本人の意見を確認することが難しくなってきた。 ご家族にはサービス担当者会議や来所時、電話報告時に意見・要望を尋ねており、運営に反映させている。	家族が面会できなくなった時期から、入居者の写真や暮らしぶりを掲載した個別のホーム便りを家族に送付し、意見の表出を促している。家族の意見を運営に反映すべく、傾聴を旨としメモの徹底を周知している。毎日来訪されていた家族から、お礼の絵手紙が届けられている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニットごとの定期的な会議、全体会議を実施し、意見・提案を述べる機会を設けている。 また、個別に意見を聞く機会を設け、些細な内容も改善できるよう努めている。	全体会議、ユニット会議は定期的に、ミニカンファレンスは随時開催し、職員が意見を表出する機会を設けている。管理者や職員の念願だった車イス対応の車両の購入や自家発電機の設置が叶っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の事情や条件に見合った労働時間、体制を整えている。 また、親睦会を行い、働きやすい職場づくりに努めている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員の募集・採用に関しては、性別・年齢・資格等を問わず広く門戸を開いている。定年制も撤廃し70歳以上の職員も働いている。 資格取得希望者については、勤務体制を調整するなど、その実現に向けた協力体制を整えている。	離職が少なく、子育て等で退職した職員の再就職もあり、個々の事情に応じて30代～70代の男女の職員が勤務している。職員数に余裕を持たせたOJTで業務内容を指導し、資格取得や研修参加の費用を負担している。ユニット毎に主任や副主任を配置した体制でチームケアを実践し、得意なことを発揮したり、商工会議所で永年勤続の表彰を受けている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	外部の研修に参加している。 その後ホーム内でも研修を実施し、内容を職員全体に教育・啓発している。	今年度も管理者が事務局を務める地域同業者協議会で開催される人権研修に参加予定である。ユニット会議などで、管理者が事例を通じてマナーや接遇について講話する機会を設けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新型コロナウイルス感染拡大により、2月以降外部研修の参加機会が減っているが、内部研修を実施し、スタッフ間で意見交換するなどスキルアップを図っている。また、OJT・OFF-JTを取り入れた研修を行っている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	全国グループホーム協議会やGHみやわかの勉強会等で交流をはかり、情報交換することによってサービスの向上ができるように努めている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にご本人と面談し、思いの把握に努めているが、緊急な入居や独居により、事前情報の把握が困難な方が増えている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでの生活状況や現在困っていること、入居後の要望を聞き、必要な支援を割り出している。また、その内容を具体的に説明し、理解して頂けるよう努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前情報をもとにサービスを計画・立案し、支援しているが、急な入居や家族との関係が希薄な方など、入居後に必要なサービスの見極めをする事もある。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一方的な支援策ばかり計画せず、日常の細かい内容(簡単な家事など)で共に支え合う関係を築けるようにしている。 しかし、近年では重症化により、全面的にケアが必要な方が増えてきた。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族来所時などに、日々の様子や思いを報告し、情報を共有している。家族の高齢化や遠方在住により、外出や受診の協力を得られない場合が増えている。電話や手紙で日々の様子を報告する事も多い。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本来、面会・外出・外泊は自由であるが、新型コロナウイルス感染拡大により、予防目的で2月より制限中である。短時間のガラス越しでの面談やテレビ電話を使った通話を行っている。	コロナ禍に配慮し、ガラス戸越しで15分以内の面会やテレビ電話などを活用しながら家族との関係継続を支援している。以前毎日訪問されていた家族から、バースデイカードや絵手紙が届いている入居者もある。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員は利用者の性格や関係を把握し、リビングでの座席配置や交流の橋渡しを行っている。また、近年は集団での活動より、個人や少人数で過ごす傾向も増えており、御本人の希望に沿った対応をとっている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院等で退居後も、ご家族様の了解を得て、お見舞いに行くなどしている。また、相談があった場合には適切なアドバイスができるよう努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の言動や会話から、利用者の思いや意向をくみ取るようにしている。それらを把握したのちにカンファレンスを実施・検討し、最善のサービス提供へと繋げている。	基本情報やアセスメントシートに入居者の生活歴や意向を整備し、さらなる意向の把握に努めている。入居前からの習慣で買い物を希望される入居者に職員が同行したり、感情の起伏を不安に起因する状態と理解したケアで、「あなたでよかった、待っていた」と笑顔で話される入居者もある。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に、ご本人やご家族からこれまでの生活歴を尋ねている。また、入院中の場合は、病院からの情報も参考にしている。入居以降も日々の会話の中からも把握するようにしている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の過ごし方や言動を個別経過記録に残し、生活パターンやADL・IADL、心身状態を把握・共有できるように努めている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	各入居者に担当職員を配置し、日常の細かい状況や課題把握に努めている。御本人を含めた関係者で、定期的なカンファレンスやモニタリングを実施し、介護計画を作成し同意を得ている。また、心身状況に変化が生じた場合は、その都度見直しを行い、内容を変更してきた。	ケア会議では、可能性を探るアイデアを話し合い、短期間の実践やモニタリングを繰り返して、現状に即したケアを実践している。嚥下困難をミキサー食や柔らかめの固形食で改善したり、排便状態に応じて処方された薬の効果をモニタリングしながら、便秘を改善している。	理念の「和やかに暮らせる」支援を最優先課題として、今後も職員や家族などの気づきやアイデアの実践やモニタリング、評価などのPDCAサイクルに沿った介護計画の作成を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌や個別経過記録等に、日々の様子や介護計画の実施状況を詳細に記録している。また、各勤務時間帯ごとに申し送りを実施し、情報の伝達と共有を図っている。その中に介護計画の見直しを必要とする事案があれば、ミニカンファレンスを行い、変更している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の状態に合わせて、食事の形態など個別対応している。また、訪問診療や訪問看護での定期的な点滴も実施したり、家族の事情で受診困難な場合、他市への受診支援も行っている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者の重症化により、外出支援が困難となってきた。防災・避難訓練の実施、各種地域行事等、当施設への訪問を通じ、地域の方とふれあう機会を設けている。2月以降はコロナ禍により、軒並み中止となっている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	提携医療機関の往診(2週間に1度)を受けている。この他に希望するかかりつけ医があれば、要望に答えている。訪問歯科とも連携し希望時に往診を受けている。緊急時に対応が出来る協力体制を整えている。	各入居者の病状報告や診察内容・結果、申し送りの欄を設けた医療機関結果報告書を整備し、適切な医療が受けられるように支援している。希望される医療機関の定期受診は家族に同行をお願いし、緊急時などは職員が対応している。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員が常時勤務しておらず、提携医療機関の看護職員や医師に密に連絡を取り、報告している。 必要に応じて受診し、適切な医療を受けている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時はかかりつけ医の指示を仰ぎ、情報交換を行っている。退院後の環境変化による混乱を防ぐため、病院へ訪問していたが、現在はコロナ禍の為、電話連絡している。その際、担当医師や看護師から経過を確認し、退院後の対応を話し合っている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「重度化した場合における対応に係る指針」のマニュアルを作成し、入居時に説明をしている。心身の状態変化に伴い、本人や家族の思いを把握するとともに、施設で可能なケアを詳しく説明している。 さらに提携医療機関や職員と協議の上、十分に話し合いを重ね、ステージごとに意思確認を行い支援している。	入居時に指針を説明し、経口摂取ができないなどの状況に応じて話し合いを重ねている。最期は病院でとの意向がほとんどで、ホームで暮らせる限界を見極め、家族に相談して提携医療機関に入院している。管理者は職員1人になる夜勤帯の負担に配慮し、現在まで看取りはない。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時や事故発生時の対応マニュアルを作成し、それに沿った対応(バイタル・疼痛の有無確認、意識確認等)で家族、管理者、主治医へスムーズな連絡・報告する訓練を徹底している。また、2月までは外部の研修にも参加していた。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	「災害時マニュアル」を作成し、食料や飲料水などの備蓄品を常備している。消防署の協力を得て避難訓練を行い、定期的な設備点検も実施している。	消防車が到着するまで2分の地の利にあり、職員には一斉メールで連絡している。9月の台風襲来時の停電は、稼働しなかった自家発電機の操作手順を確認する機会となり、職員にはアンケートで振り返りを行い、防災意識を高めている。中には養生テープの効果的な貼り方の意見もあった。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりを尊重し、その人らしく日常生活が送れるようなケアを行っている。その時々にあわせ、プライドを傷つけない声かけや対応ができるよう心掛けている。	〇〇さんと氏名で呼称し、日頃から丁寧な声かけを実践している。脱衣場と浴室入口の間にカーテンを設置し、入浴時のプライバシーに配慮している。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者の重症化により、自らの思いを発信できる方が減少している。職員は分かりやすい表現で説明し、選択形式で尋ねる工夫をしている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ラジオ体操と口腔体操は、習慣化しており、3分の2以上の方が参加される。余暇活動は職員が決めることなく、御本人様の希望に沿った過ごし方を提案している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	寝たきりなど要介護の方は、起床時に整容介助している。御自分で出来る方は、各々に化粧やおしゃれを楽しまれている。また、訪問美容室を利用しカットやパーマ、カラーをされている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の食材を使った家庭的な料理を提供している。日頃よりリクエストを募り、誕生日など好物を提供している。入居者の重症化により、食事の準備・片付けは困難である。一緒に食事を食べるようにしている。	密を避けて、3~4名での食事を支援したり、重度化やその時の状況に応じて自室での食事を支援している。ちらし寿司や茶わん蒸し、ハンバーグなどは好評であるが、常備以外にも多種類のカップヌードルを揃え、自分で選んで食べる企画も好評である。	コロナ禍の中で面会もままならない状況の中、食を楽しむことに鑑み、作成されている昼食や夜食の写真付きの週間献立表に入居者のコメントを書き添えられ、ホーム便り等と一緒に送付されることを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量のチェック・カロリー計算を行い、栄養状態の把握に努めている。嚥下状態・咀嚼状況を鑑みて提供形態を変更したり、自力で経口摂取できる工夫をしている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアを実施している。入居者の能力に応じて道具の準備から介助まで行う。また、薬品を使った義歯洗浄を行うなど、清潔保持に努めている。状態によっては訪問歯科を利用している。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	日ごろより排泄パターンを把握し、声かけ・誘導している。重症化に伴い、トイレに座る事が出来ず、全面的にオムツで対応する方も増えてきた。	立位が保持できる入居者は排泄パターンに応じてトイレでの排泄を支援したり、提携医療機関に排尿や排便のコントロールについて相談し、排尿回数や排便のリズムを調整している。排尿したことを忘れて頻回に尿意を訴える入居者には、気をそらす対応に努めている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘に良い食材を使った食事内容や、積極的な水分摂取を促している。便秘症の方は医師に相談の上、内服薬を使用したコントロールも実施している。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	利用者の体調・負担を十分に考慮して入浴を実施している。個浴・シャワー浴を行う。肢体不自由な方は、安全に配慮し職員2名で行い、清潔保持に努めている。	週3回の入浴を支援しているが、職員2名体制で支援する入居者もある。白を基調の清潔な浴室でゆったり介助されての入浴は入居者のくつろぎの時間となり、入居当初は週1回入浴していた方も、ホームの生活に馴染まれて週3回となっている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	各々のライフスタイルにあわせているが、昼夜逆転などに注意している。健康状態(血圧低下、浮腫等)によっては、日中も臥床を促す場合がある。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬チェック表を作成し、投薬時に本人確認も行い誤薬がないよう最善を尽くしている。処方箋は常に閲覧できるよう全てファイルに綴り、その内容の理解に努めている。病状に変化がある場合、提携医療機関に連絡し、医師の指示を仰いでいる。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみなどの簡単な家事手伝いをしていただいている。また、最近では個人での読書やテレビ鑑賞が好まれる方が増えており、個別の支援が多くなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけるように支援している	新型コロナウイルス感染拡大により、2月以降外出支援は殆ど出来なかった。9月に入り、本人希望での眼科受診や短時間の買い物は実施した。外出制限前までは、スタッフ付き添いで少人数で散歩や買い物の支援をしていた。	車イス利用者が増加し個別対応が必要となっているが、今後は車イス対応の車両を活用し、車窓からのドライブや外食に出かけたいと管理者は話している。店舗でソフトクリームやハンバーグを楽しむ日常が待たれている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理の出来ない方が殆どである。お金が無いと不安な方数名は、安心の為に所持されている。個別支援で買い物に行かれた方は、その中より支払いされる。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を所有している方もおり、自由に連絡されている。 所持されていない方も、施設の電話を使って友人や御家族と会話をされている。 手紙をやり取りする方は現在はいない。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	空調設備の使用やドアの開放により、室温調整したり、花を活けて季節感を演出している。また、照明の調節をして明るい空間づくりに努めている。	玄関前の手入れの行き届いた季節の花々の寄せ植えや、観葉植物の鉢が置かれ明るく清潔な玄関から、ホームの在り様が伺える。1・2階に各ユニットが開所し、エレベーターが設置されている。時間毎にテーブルやドアノブを拭いて消毒したり、換気に注意するなど、いつでも寛げる共用空間づくりをしている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	新型コロナウイルス感染拡大により、2月以降のリビングでの座席配置は、広くスペースをとるように心掛けている。 また、それを決める際、入居者同士の関係性などにも考慮している。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅から使い慣れた家具等を持参される方もいらっしゃる。ご家族の写真・雑誌・ぬいぐるみ・テレビ等を置かれており、心地よく過ごしていただけるよう努めている。	居室入口は表札がかかり、日用品や洋服かけ、椅子が持ち込まれている。清掃が行き届き明るい居室は、ベット傍に収納ボックスが置かれるなど、個々の心身の状況に応じた居室作りを支援している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室入り口は表札・写真・花を飾り、認知症であっても御自分の部屋であると理解できるようにしている。 また、各居室・廊下やトイレに手すりが付いており、自力でのADL動作が継続して行えるようにしている。		